

巻 頭 言

大学院修士課程を学部の上に設置しようという話は、1987年の文学部設置の時から懸案であった。10周年を迎えるに当たって、是非研究科を作りたいという声を外に向かって発せられるようになり、新しい時代に即応した構想を文学部内で模索することになる。文学部3学科の上に3専攻を作るというのは通常的手法だが、それでは従来の枠組みから1歩も踏み出していないことになり、実際にも有効ではなさそうである。ところが、大学院のための新規雇用はしない!という大命題が前提になっているために、現有勢力によって構想しなければならないのが現実である。このありうべき構想と現実との乖離は、簡単に解決できることではなく、それから相当期間はさまざまな案が現れては消えていった。

最終的に案としてまとまった段階では、①地域言語文化研究コースを基盤として②第二言語習得研究コースと③表象文化コースの二つのコースがあるという、1研究科3コースという構想であった。この構想を基にして、文部省への設置申請案とすべく、学長・理事長との話し合いをし、その経過を踏まえて、表象文化コースを圧縮して地域言語文化コースの中の発展部門「言語芸術」と位置づけ、1研究科1専攻2コースという最終申請案がまとまったのである。申請後は、事前の十分な準備のおかげでスムーズに事が運び、12月22日付けで認可されている。

準備の段階から、言語文化研究所は文学部3学科と並ぶ大学院研究科の基礎となる組織と位置づけられており、従来の活動を発展させるとともに、大学院の研究・教育活動を支援する主要な機関となる予定である。

1999年1月

言語文化研究所
所長 田口和夫